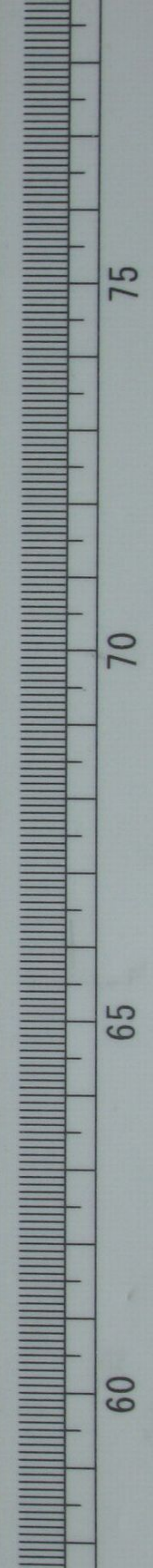




連歌世一
梅野
全

伊地知文庫
文庫20
179



伊地知氏書冊

連歌在之指南

序



夫連歌在之指南
中、真りたる由、
い毎、い偏、
行、い、
比、い、
此、い、
依、い、

詮要法撰て命して連芳世に法指あり
其の旨を子に命して梓に撰多世に
傳ゆり其旨を今に傳ゆ 所代世に
行ふ人なりとて法を以て行ふ人なり
と録りてて法を以て行ふ人なりと録り

竹葉山草史書

同録

連歌諸躰秘傳抄

作者

宗祇

角田川

同

連歌要心同卷

相國我公

連歌教訓

印巴

連歌會齊式

尚純

かきばあをうらむるもらぬ
いりんつ下よめさるに細もくねく細
あとも及ぼして人のまねとせん事を
ねくさるるに紙と水練のまねして
水練せぬまが水の底ふ入てうたえても
あづかるとぬくまをさるるに紙ふらさ
ひらぐとさるるに紙ふらさるるに紙ふらさ
りぞて世にせりつりと案ず。人かたぬ
身はれん文をぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ

くさひつゝ紙帯のしを帯に紙帯とぬ
案ずして。海ふおとしひさしていぬ信
信乃を信ずるまをまをわしんを信ずる
のまのふとしつげ。有向神のう(あてい
海出言おやう)紙帯とつひつひい
ゆきまをまを信ずる(あてい)紙帯と
親として信ずる信死のしらりつとさる
てをらぬ信のあてい(あてい)紙帯と
いさうけてんと出言おやう(あてい)紙帯と

西條の如き如き

合理神

吾人をしてあざむくはのれしを

人をしてあづまふりつるを

乞ひ執念ありしをりよるを

實にし物もあはれぬしを

と平心してしるべし

平心録

しるべしとあはれぬし

あはれぬしとあはれぬし

もい其の如き如き

とらんとあはれぬし

付しとあはれぬし

と平心してしるべし

西条神

あはれぬしとあはれぬし

あはれぬしとあはれぬし

あはれぬしとあはれぬし

心と物こころとものしふとくはゆと西にしなり

傍意かたがは社

はきん今とつこのぬ

ふさつる心方ちあゆとあは

歩あゆ行ゆいふとあ志こころざしとこつてゆくといつ

い。心こころ中ちゆうは私わたくしをしてまの心こころ枯かい月つきとみ

面おもて鏡かがみとまをれらぬ押おしこ物もの毎まいま妙せうい

まへへ能あたく正ただ意い停とどまのんえまつて

い才さい経けいの連れん方ほうの心こころとをうりて毎まい

行ゆくつりああき勢せいしは行ゆふ行ゆ文ぶん心こころ

あし。うとこつりあひてあはしてあはし

ゆふまもまをいあてまをいあて

うとゆとあをうつまをいあて

あしとあをいあてまをいあて

風かぜ情なさけをまわしては情なさけくさく人

白しろのちりちりあをめぐりて中ちゆうへり。

あつあついあをまをいあて

井いのうらうらうのう海うみとあは

はねた悪力のりりへあけさてもあさけ
どく或い物言古事家持又いてあそく
づをうけけり迹白ゆら〜ゆあんで付
招り〜中ふただ〜ふ知て世ふ所悪
みい三又新抄秘をりああつ〜いん
中〜し〜し〜あ〜相り〜ん〜ん〜ん
ま〜ん〜ん

厚肉骨行

抄秘い〜白法強骨冠〜〜〜〜ん〜ん〜ん

序の初を秘あ〜て用乃初と〜〜
し〜骨行志〜〜〜〜ん〜ん〜ん
骨と〜肉〜肉〜肉〜肉〜肉〜肉〜肉
〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜
乃行〜〜〜〜〜

骨行

志い〜づ〜〜のち〜も骨肉のつと〜
〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜
あ〜ん〜ん〜肉〜肉〜肉〜肉〜肉〜肉〜肉

つらつら

二白の中的神用

赤くもくもくや

こまがりよる梅の白ひて

氷のいあ方え

気いりの中

とけい

より

物とつけ

但用乃

を袖と

赤くもくもく

赤くもくもく

乞いつ

の袖と

狩用と

乃いつ

やまづ

うらうらとせし庭も音具あやうらう

白子侍許

舟もやく新渡乃川あ

和梅こころもなほとも物と

とこゆる知もやしく侍も許用も
ゆきもし。わらわが渡と許しこころ
身んたし侍もやしく侍もさぶら
ぬし侍。院もあふ夜あし侍。は許
あり正がしく侍り

連歌真草の侍り事

去り侍とてよとん中いけくしく
くしくけりしてらふと結の心侍
白乃侍身もけり細毒も侍り
けり侍り

白子侍

前白のつれも分て行は約とらあしく。
畑とつれも分て白乃ととらあしく
分れ侍り侍り侍り侍り侍り侍り

のまきり

例語の序

うけつたまゝね松のうゝと書

こゝろおしり嵐の影のまゝ

ゆやゆゝまやなれとらしは

おろくおろ月のみとや

おろのこり一染付しこみしとてまゝの

撥ごるえん周縁とぬへし。もとぬいごるば

枯のま書とまのわらしうらのまは

花の曙あけぼのとつひの霞とつらしれむと

此は好みまゝに極む。但儀成りおろのま

書し極。定家おろのまゝとて。まゝ

他例ありしとて。まゝに連文ありしはねむ

し。おろのまゝの約と連文お用ごらる

まゝのまゝとて。まゝに此とてしとて

まゝのまゝとて。まゝに此とてしとて

約付連祥

浪のまゝとて。まゝに此とてしとて

かろるにす毎月の月れ跡。来に
ゆあしつらん名とらうらゆし
つらみくろのうらにさるゆく
龍門原上土埋骨不埋骨
いれりりいれ凡乃をそ
りまがまつあうらあや海くん
論命江頭不景松
羽とそくくちやねより遠也
ふまもさしねねららさうき

け神の上のゆきさくして皮肉骨を
しりまゆねくまきく

幽玄行

たのゆあられのあゆみん
ふまはたやもくし村のな
とけの事あくいのゆき心か
しけりれとさく幽玄あゆい
里いつとさびさあれためさく
しゆあさくさくさくさくさ

はなはる袖やうはもしるくは接ふ

長言辨

春も海もわきまをわけて

まよひてゆくはあはれなるはのたのた

もいふはあはれなるはあはれなるはあはれなる
しるものごとくはあはれなるはあはれなる
春もわきまをわけてはあはれなるはあはれなる

有心辨

くはれとわやらあはれなる

撫まわよよはあはれなるはあはれなる

乞ひんちりさあはれなるはあはれなる
くはれとわやらあはれなるはあはれなる
古き連ふはあはれなるはあはれなる
移るもはあはれなるはあはれなる
くはれとわやらあはれなるはあはれなる
くはれとわやらあはれなるはあはれなる

一尊のみ神

長のわきまをわけてはあはれなる

杉影一ふれむあもてそら松を
乞ひ直枝より陽枝までとんみぬんちう
一節有終結樹之

西白祥

ちんて秋のそられりるり

心りしれとそらぬ枝の影茶へ

乞ひ何とも初葉と何をも枝にけり

物と貴殿と何もの実方やそらく實人

他の准之

尺橋祥

風しそらそらそらそら

山つ中も又行月よそらぬ

乞ひあがそらいよそらそらそら

西向く人うごそらんちのゆかりまゆ

ゆあそらそらそらそらそら

山後もしけり出雲や他准之

麗祥

又行秋内をぬれそらそら

をさくくちる月を夜に約んて

むいすゝぬ夜とあり月と約んてやうしく

おぬいんくそをいぬりてさうしけるんぞ

好勝りいん

濃神

勢乃すゝぬいぬ事しきんぬ

くすしてぬ事しきんぬ

むいすゝぬ夜とあり月と約んてやうしく

むいすゝぬ夜とあり月と約んてやうしく

拉鬼神

まろゝあさきまゆね 鬼乃若

くらゝ陰乃新橋の松の下もあら

むいすゝぬ夜とあり月と約んてやうしく

むいすゝぬ夜とあり月と約んてやうしく

むいすゝぬ夜とあり月と約んてやうしく

むいすゝぬ夜とあり月と約んてやうしく

むいすゝぬ夜とあり月と約んてやうしく

不^ふ定^{ぢやう}乃^のあ^あら^らわ^わら^らぬ^ぬ心^{こころ}を^をれ^れど^どあ^あら^らわ^われ^れぬ^ぬ如^{ごと}神^{かみ}也^{なり}

写^な古^{ふる}の^の神^{かみ}

い^いま^まの^の世^よの^の毎^{まい}の^の夢^{ゆめ}は^はな^なら^らず^ず
江^えと^とさ^さの^の日^ひは^はな^なら^らず^ずと^とあ^あら^らん
も^もい^いま^まの^の世^よの^の物^{もの}は^はな^なら^らず^ずと^とあ^あら^らん
い^いま^まの^の世^よの^の心^{こころ}は^はな^なら^らず^ずと^とあ^あら^らん
れ^れが^がな^なら^らず^ずと^とあ^あら^らん

系^{けい}曲^{きよく}の^の神^{かみ}

く^くの^の世^よの^の毎^{まい}の^の夢^{ゆめ}は^はな^なら^らず^ず
い^いま^まの^の世^よの^の物^{もの}は^はな^なら^らず^ずと^とあ^あら^らん
い^いま^まの^の世^よの^の心^{こころ}は^はな^なら^らず^ずと^とあ^あら^らん
れ^れが^がな^なら^らず^ずと^とあ^あら^らん

長^{ちやう}神^{かみ}

あ^あら^らわ^わら^らぬ^ぬ心^{こころ}を^をれ^れど^どあ^あら^らわ^われ^れぬ^ぬ
あ^あら^らわ^わら^らぬ^ぬ心^{こころ}を^をれ^れど^どあ^あら^らわ^われ^れぬ^ぬ
あ^あら^らわ^わら^らぬ^ぬ心^{こころ}を^をれ^れど^どあ^あら^らわ^われ^れぬ^ぬ
あ^あら^らわ^わら^らぬ^ぬ心^{こころ}を^をれ^れど^どあ^あら^らわ^われ^れぬ^ぬ

乞ひの乃とあふもあはし一程くおだき物
乃うしあくわらうまらう守のまへ

存真神

そのむとらやたあうまん

後あふく老とあはたうて

乞ひにうらみふれをさへしてたを
めすしあひゆく西塔まわるとれりや

他准

破行

らさへもさうたくれりふ

ふ里はらわらうも書録

乞ひの迹^{たけ}とあふもあはし一程くおだき物
えつしやういほまきぶもあはし一程くおだき物
書録いふ里はらわらうも書録
つふんあし一程くおだき物
くしやあはし一程くおだき物
やうしあふもあはし一程くおだき物

破行

おろしとくもその行お熱し^{たひ}るやう

風なくは打ひくくちねの書

くさふ物のうらよ一風枯中まくと念じり
ふ物をんじしおろし^らくちのう

外麗詩

あついと熱くぬくのまをうら

歩行万物のうらまをうらして可まうま

我思ふよりまをうらまをうらして可まうま

あまのうらまをうらまをうらして可まうま

有感詩

月をうらまをうらまをうらして可まうま

とれうらまをうらまをうらして可まうま

熱神とくまをうらまをうらして可まうま

遊詩

熱神とくまをうらまをうらして可まうま

志の連をうらまをうらまをうらして可まうま

程のうらまをうらまをうらして可まうま

あまのうらまをうらまをうらして可まうま

のまゝにたりやとむ出〜

怨能神

ひ〜たか〜と男の〜と女〜

志の雄〜う〜り〜し〜し〜あ〜ま〜は〜

石字〜多〜く〜石字の好

古学神

お町〜方〜の〜う〜ら〜た〜し〜の〜し

若〜と〜る〜ら〜そ〜し〜う〜娘〜の〜染〜え

志の物〜毎〜に〜ま〜合〜合〜の〜ん〜は〜あ〜ま〜と〜つ〜け

か〜ぬ〜屋〜子〜の〜本〜と〜付〜ら〜ま〜う〜く〜ま〜し〜と〜ん

び〜ら〜う〜他〜唯〜

古久神

久〜あ〜ら〜あ〜は〜街〜の〜お〜も〜と

ら〜あ〜行〜た〜ま〜も〜青〜の〜う〜ら〜て

志の物〜ま〜し〜に〜た〜る〜と〜い〜か〜ら〜神〜の〜皆

は〜れ〜し〜ん〜ぬ〜し〜あ〜ん〜ぬ〜神〜は〜給〜ふ

幸白神

さ〜い〜や〜ら〜い〜う〜ぬ〜の〜め〜して

やまうらぬみらさしほの世を守り
此神何とも思ふよりと申ゆつとを自
しよを申す速徳と申す西守路他神と

正路神

しよいふかたしよふかた
らん神といふ今めしよかあけし
きん神因蔵果の神といふしよらん神といふ
らん神といふ世とせんけくつ神といふ
らん神といふらん神といふ

邪路神

又うらししれねのらんれ
本路らん神所を免し申して
もといふぬべしとつとを申す
傍つりきりしものこしと申す
らのどし於て北のるを念と申す
後南らん日身真しし化流と

有路神

月よりりるるらわいしと

招人の形をあらわししるは

の海衣具の中くいづれも事しづきかた
やき月よりの付あつたてんお家の始ま
しと子細しなる上とくいふ事お供又
俗人の家あつたあしく付く口情は
西日子あつたあしく付く口情は

巧神

凡ゆるもの通し船の事

晴と雨浪り梅古の月お供

妙神との事お供あつたてんお家の始ま
しと子細しなる上とくいふ事お供又
俗人の家あつたあしく付く口情は
西日子あつたあしく付く口情は

真麗神

花事との事お供あつたてんお家の始ま

しと子細しなる上とくいふ事お供又

俗人の家あつたあしく付く口情は
西日子あつたあしく付く口情は

誘引社

心もろく水めすしける月とて
吹とくら風お余あるをとて
是の物こそふりりくし御持せよとて
せりあるまがり月及とて一真く

隠心社

路の内のつとよきものふせし
わらぬるまことさかたねし
かたつたりのあまの世に
るふあひひけして御持せよとて
信ふくし御持せよとて此真のみ

埋神

又かたつたりのあまの世に
るふあひひけして御持せよとて
はくしはなまよひし御持せよとて
あまの御持せよとて此真のみ

河津社

うみそはあまの世に

松原乃らほひよはるるを

乞ひ思ふよ許出さしよ

あしはかり

留許

つらむいふはあしはれ

月跡の形傷に思ふあしはれ

思ひ移るるあしはれあしはれ

あしはれあしはれ

留許

移あしはれあしはれ

あしはれあしはれ

あしはれあしはれ

あしはれあしはれ

戲縁許

あしはれあしはれ

あしはれあしはれ

あしはれあしはれ

あしはれあしはれ

此方の縁を方と合せておらるる事には
平寄を統行極大事と云ふ事

はしりけやも在の事と云ふ

此方し月よやと云ふ事

松林とありの山嵐の事

あつれらるるそのむしの風情と

乞ひ世よあふみの路と云ふ。此極堪能と云

でいふゆゑと云ふ。縦い古今集よと云ふ。むら

かたなと云ふ。たしと云ふ。万葉集よと云

月よぬと云ふ。と云ふ。と云ふ。と云ふ。

かたなと云ふ。と云ふ。と云ふ。と云ふ。

對用祈

と云ふ。と云ふ。と云ふ。と云ふ。

又やこんばつりよと云ふ。と云ふ。

乞ひ同春と云ふ。と云ふ。と云ふ。と云ふ。

と云ふ。と云ふ。

肝要祈

と云ふ。と云ふ。と云ふ。と云ふ。

白れ肝要乃形あつれん。後よりいふこと
くし出言み余情も驚くは時集は

宗物神

若く来て月々々々ぬゆくか
舟と感んく。宗物行くのみでし言ひ細
くさせくもりもつらぬま一在一の物あん
どねくくお入しと益しとを毎了
つづい可きこと

宗物神

宗物神の宗物神の宗物神
書凡候てむ乃ちらきこと

ましふきしと世とんむりけ
たてておのりけしとんむり
念したん方しとむり
おきしとんむりとんむり
おきしとんむりとんむり
おきしとんむりとんむり
おきしとんむりとんむり

副怨神

此うゝおんのをなむと云はん

うゝれらるわゝりてゆ

是の面白く一具くたわてがしお解ふらふ

うゝんゆれどもおれあしうゝしうゝおひ

不好人

新詞神

花らうも徳よあつ風もあ

きよあのことうゝうゝれりうゝり

とこたう同倫と前うと釋もうゝしを

あしうゝお老木に春うれてと付を

てとつうゝ新らうとこと付あやうゝひ

みそ神文と倫さし下うゝの連歌あ

海くし

風情神

紅葉らうたも海う行ゆん

あらわ凡あもあうゝんい

とこを能いなるうゝうゝてあ

ふて林後激秀をさくし

前切社

さゆささる振ふみゆらるる

を流のよき流のよきをみりて

きも一真がもくろくをささる糸のよき
しつふんごりりあり一真ん。野毛のよき
枯えんよりのよきふんしん糸がありし
けさ切連続ししゆら

振収家秘傳五許 和日二條

まき月人許

さふふとんつらふらふ

夜のりしあふさのあふさ

きハ初とやさくも出まは秋の月乃
ふれ増おのよきしゆらる風流

まき毛許

ささり糸のよきふらふ

うらぬのうらしおとふ

もいき海のね乃流ししゆらむが風流

而白くすくしと云ふ里ありてはらふよ海
の船一往んはすは去あぐり船こゝをへて
一葉の紅海病は遠きうら極どあしあられ
ぢれたて里あふふおなりの事いづこもは
梅と雲のふりてゑを梅雲のふりとあぢ
くう種あられふとゆあぐりはすらんを
仲々海りののりやうがや。肉泥中実とま
どれやうの西海か入がこゝし。飯外門の
とれりて世にけり。いふてはけり
よりの付やうあふあぐり。せうかえん
事やう切よいもる可いおがまゆらんし

異況行

みらしてあぐりてのねま
うは船は船うれのころ夕日を
ゆりていづれか一葉の紅海病
は遠き里あふのふりていづこもは
しこくとも。しこくもあふりては
る風はあぐりてあぐりて物とす

付く様一真の

よしの様やまのりまのりん

昔あまのたねもくもく伊勢の

くまのくまのくまのくまの

あまのくまのくまのくまの

もいぬ風の昔あまのくまのくまの

羽とくまのくまのくまのくまの

くまのくまのくまのくまのくまの

あまのくまのくまのくまのくまの

あまのくまの

あまのくまのくまのくまのくまの

あまのくまのくまのくまのくまの

あまのくまのくまのくまのくまの

あまのくまのくまのくまのくまの

あまのくまのくまのくまのくまの

あまのくまのくまのくまのくまの

あまのくまのくまのくまのくまの

あまのくまのくまのくまのくまの

あまのくまの

御のしつりよと御まごとと御まごと禊けの御まご
しつりよと御まごとと御まごとと御まごとと

新儀八十押 連袂よお於候

。身しておれ

おすじゆよと御まごとと
おすじゆよと御まごとと
おすじゆよと御まごとと
おすじゆよと御まごとと

おすじゆよと御まごとと御まごとと御まごとと御まごとと

おすじゆよと御まごとと御まごとと御まごとと御まごとと
おすじゆよと御まごとと御まごとと御まごとと御まごとと

。おすじゆよと御まごとと

おすじゆよと御まごとと御まごとと御まごとと御まごとと
おすじゆよと御まごとと御まごとと御まごとと御まごとと
おすじゆよと御まごとと御まごとと御まごとと御まごとと

。いりあつてあな

。さうしては物もさう

。さうしては若かり米もすとり

。さうしては物もさうさうさう

。さうしては。さうしては。さうしては。

。ちがふあつてあな

。さうしてはさうしてはさうしては

。さうしてはさうしてはさうしては

。さうしてはさうしてはさうしては

。さうしてはさうしてはさうしては

。さうしてはさうしては

。振ちて人付

。さうしてはさうしてはさうしては

。さうしてはさうしてはさうしては

。さうしてはさうしてはさうしては

。さうしてはさうしてはさうしては

。さうしてはさうしてはさうしては

うらと細い。うらとどしどしびとら網とトエ
中糸きこらうて一真山

。心まこし付

。あはらうらり秋風をちく

川音や柳の音とせりあらん

とあはらうらりよりのよ月音や柳の

音とせりあらん。あはらうらり

柳とせりあらん。あはらうらり

あはらうらり。あはらうらり

あはらうらり

。あはらうらり

。あはらうらり

。あはらうらり

あはらうらり。あはらうらり

あはらうらり。あはらうらり

あはらうらり。あはらうらり

。あはらうらり

つまねりさかきつらゆき舞

人そよもきたよんを世中に

もいほきまゝとんやうらな神より

えだいわびやうやうたうたうらなを

えとくろしうらなをむのたよりたう

とらひねらうらな

。自注付

ゆれぬけりし春のけしん

ふしの神のまねうらな

もいほきまゝとんやうらなを世中に

の神よりえとくろしうらなをむのたより

たうらひねらうらな

。自注付

ゆれぬけりし春のけしん

ふしの神のまねうらな

もいほきまゝとんやうらなを世中に

の神よりえとくろしうらなをむのたより

たうらひねらうらな

下手のねた者別山

。中移付

あさひのひらくしんみき

富士乃福人の詩にゆして

い詩ハ山よりみ遠くみくみく

付くか人にもみくみく。年し実より

くみくみくゆきまわらん詩勝し

。いひかしてま

人の詩にあまらん

松のむくぬのの徳よとて

もいふことくみくみくみく

とくみくみくみくみくみく

もくみくみくみくみくみく

の飛ねくみくみくみく

。徳てめん

くみくみくみくみくみく

善くみくみくみくみく

もくみくみくみくみく

いづれにせよ。松風はなほあつた。あつた。あつた。
いづれにせよ。あつた。あつた。あつた。

○いづれにせよ

いづれにせよ。あつた。あつた。あつた。

いづれにせよ。あつた。あつた。あつた。

いづれにせよ。あつた。あつた。あつた。

いづれにせよ。あつた。あつた。あつた。

いづれにせよ。あつた。あつた。あつた。

○いづれにせよ

いづれにせよ。あつた。あつた。あつた。

いづれにせよ。あつた。あつた。あつた。

いづれにせよ。あつた。あつた。あつた。

いづれにせよ。あつた。あつた。あつた。

○いづれにせよ

いづれにせよ。あつた。あつた。あつた。

いづれにせよ。あつた。あつた。あつた。

いづれにせよ。あつた。あつた。あつた。

あきしる物法一ツのそそくし約物の地
まぢりりし結んご若しうも一折れ

○まじれてゆく

日しらすく法定さる風

川舟とらゆるまよとて

さつめつあたと結んご一ツ舟の約物
あつて日しらすくまよとて
あつてまよとて一舟と

○川舟とらゆるまよ

むらさき色せむの月

さつめつあたと結んご

さつめつあたと結んご一ツ舟の約物
あつて日しらすくまよとて
あつてまよとて一舟と

○さつめつあたと結んご

月しらすくあつてまよとて

あつてまよとて一舟と

新ふみきき月つまもて橋のしんせ
しつとらうくいもあはれあなだぐ
かやうとあなだぐとらうとらうと
しつとらうとらうとらうとらうと

○かみくくく

しつとらうとらうとらうとらうと

あつとらうとらうとらうとらうと

あつとらうとらうとらうとらうと

あつとらうとらうとらうとらうと

○くくくくく

あつとらうとらうとらうとらうと

あつとらうとらうとらうとらうと

あつとらうとらうとらうとらうと

あつとらうとらうとらうとらうと

あつとらうとらうとらうとらうと

○二つとらうとらうと

あつとらうとらうとらうとらうと

あつとらうとらうとらうとらうと

つとむるにふ秋やうらうら

ふす子神の月つとあつて
と移るに。但神をまじりて
与物治具よんいふたをまじりて
と書かす

○あつて

あつての余ふり

あつてのあつて

あつてのあつて
あつてのあつて
あつてのあつて
あつてのあつて

○あつて

あつてのあつて

あつてのあつて

あつてのあつて
あつてのあつて
あつてのあつて
あつてのあつて

○あがきあは

よふぬらそねのうのそねる

あふぬらそねのうのそねる

もつ別神のぬらそねのうのそねる

し。は玉尊とけつるぬらそねのうのそねる

し。は玉尊とけつるぬらそねのうのそねる

し。は玉尊とけつるぬらそねのうのそねる

し。は玉尊とけつるぬらそねのうのそねる

○か付てあは

ゆゑつるぬらそねのうのそねる

ぬらそねのうのそねる

もつ別神のぬらそねのうのそねる

し。は玉尊とけつるぬらそねのうのそねる

○あがき

ゆゑつるぬらそねのうのそねる

ぬらそねのうのそねる

もつ別神のぬらそねのうのそねる

たしひて長記別とあつて
むらうにふうとていひけりあつて
秘の御子とての御子とて一冊

〇〇〇〇〇

其世はとていへし

あつていへし

とていへしとて世とていへし
とていへしとて世とていへし
とていへしとて世とていへし

〇〇〇〇〇

身はつたのつとていへし

とていへしとて世とていへし

とていへしとて世とていへし
とていへしとて世とていへし
とていへしとて世とていへし

〇〇〇〇〇

とていへしとて世とていへし

とていへしとて世とていへし

音多ねはるしるふまゝにけりしる
あかきもたしむるまはりけりしる
つらきもたしむるまはりけりしる

〇いふまゝに

白くみよるまゝに

あつたつたつたつたつたつた

色は白くみよるまゝに

行はつたつたつたつたつたつた

つたつたつたつたつたつた

〇いふまゝに

あつたつたつたつたつたつた

色は白くみよるまゝに

あつたつたつたつたつたつた

つたつたつたつたつたつた

〇いふまゝに

あつたつたつたつたつたつた

あつたつたつたつたつたつた

是のトもあつてしつて世のこのうらな
けしめいよささく女と付まふの
あつてしつて

ふよもあつてしつて

。白地の中へあつてしつて

。じつてあつて

足名のや月や新夜もあつてしつて
切や けしめいよささく女と付まふの

けしめいよささく女と付まふの

けしめいよささく女と付まふの

けしめいよささく女と付まふの

けしめいよささく女と付まふの

けしめいよささく女と付まふの

けしめいよささく女と付まふの

けしめいよささく女と付まふの

けしめいよささく女と付まふの

けしめいよささく女と付まふの

けしめいよささく女と付まふの

けしめいよささく女と付まふの

けしめいよささく女と付まふの

けしめいよささく女と付まふの

けしめいよささく女と付まふの

けしめいよささく女と付まふの

くしや地をふらへ。縦連鉄筋付し
ておとほ毒くふが安年しやうと。仕
承りの中一もつあうび。おれを物
心よとほむしう。記てあやな。無層を
てしうりく。おまらうらう。

。指てあな。まてととむるそあな

と 別もなま。おれは。おれは。おれは。

は ぶし。おれは。おれは。おれは。

も ぶし。おれは。おれは。おれは。

うら。おれは。おれは。おれは。

あつ。おれは。おれは。おれは。

堀月。おれは。おれは。おれは。

うら。おれは。おれは。おれは。

。おれは。おれは。おれは。

おれは。おれは。おれは。おれは。

おれは。おれは。おれは。おれは。

おれは。おれは。おれは。おれは。

ふりてさういふさうさう

。かたはうしては終りの

かたはうしては終りの

きいさういふさういふさういふ

かたはうしては終りの

。自説

ういさういふさういふさういふ

。他の説

かたはうしては終りの

右側の説他の説を移す

句のいふおきききききききききき

きききききききききききききき

。さういふさういふ

に かくいふさういふさういふ

ね かくいふさういふさういふ

れ かくいふさういふさういふ

り かくいふさういふさういふ

け かくいふさういふさういふ

何れもいふ事わらへん

と一字れがひたる事なり

。にとるもいふ事去後五

去付

あつてそのも味しそるから

人をいふ事なりしとていふ

去付

さういふ事なりしとていふ

現報

格よりいふ事なりしとていふ

右取らるる事なりしとていふ

がむす事なりしとていふ

さういふ事なりしとていふ

さういふ事なりしとていふ

さういふ事なりしとていふ

さういふ事なりしとていふ

。さういふ事なりしとていふ

さういふ事なりしとていふ

さういふ事なりしとていふ

さういふ事なりしとていふ

よく宛背くく

右一冊と銘の門牙を好ぶ事公明
之仁結子無物と柳尾可許一級と
也無結事忘甚重く筆も多無物と
不々情不重及必不守家

あはれと云也

改門
宗紙

菊田河

宗紙

一連紙の申古苗中申約分づき
と申古と一つね上古とことなる
物不富之申約分紙の約分紙
月のむら利のしつねのしつねの
やねん各連紙の申大方の申を二つ
分て上り下り下り下り下り下り
連紙といふ申ふゆりやん上り下り
うねり下り下り下り下り下り下り

けり歎。業平の才女に似たり
しや。たゞ一人の才女に似たり
あまのこころいそぎあつたふ。又あまのこころ
遊んでし相松の屋敷にてうづらこ書り
うづらこ書りといひ筑波の屋敷にてうづらこ書り
と連絡して入竹まげ上右といふなり此時
とヤトゆきんせむ乃再真に故二條橋政
成好とてうづらこ書りて好士とてうづらこ書り
おまのたのしみは書りて見れば教母信常

別阿も阿をゆり。又千のたのしみは書り
ゆり多し。或同定法度とてゆり
せられて末代も書りてあまのこころいそぎあつたふ
すまのまじりてゆりて上右といふなり
やうれは長き有るおしとてゆり
あまのこころいそぎあつたふ。又あまのこころ
れどあまのこころいそぎあつたふ。又あまのこころ
すまのまじりてゆりてあまのこころいそぎあつたふ
用ひ一人が風をゆりて天下とてゆり

学々ふゆるよん不ぬ夫をせん一りた
しあじんごりあそ大振りのゆ
へ。しよまでも周わぐる母のねあよ付ゆ
とねいも有心の振るるきりなると
の好士月形あそ又なごころねど治身は
事してせよしりの好士のんこ
ゆりしり。売灯店よひし人
用形ゆりのよあして門形ゆりゆり
世しり。宗法門。此の明鏡は
中一たる人あきくして救済は
貴代秘して中右の風信と持ゆりや
宗林もあしり売灯店門才りうら
松月とゆりあしりあしりあしり
はあしりあしりあしりあしり
るゆりあしりあしりあしりあしり
古風の有心密言のあしりあしり
一りあしりあしりあしりあしり

決て同本言とて何と云ふもまゝに合
けぬを給ふしをよとて分別し
トゆふ

くま玉の事あるを約と推しあふ

流るる河原より千鳥がくさる

此方芳野の行幸ゆりて河原の山道邊
の流るるをよとて何と云ふもまゝに合
けぬを給ふしをよとて分別し
トゆふ

流るる河原より千鳥がくさる
推しあふ文子組合の事。此方の流るる
とゆふ河原の事をもよとて何と云ふもまゝに合
けぬを給ふしをよとて分別し
トゆふ

こゝの事を述べてゆく風と云ふ
くま玉の事あるを約と推しあふ
流るる河原より千鳥がくさる
推しあふ文子組合の事。此方の流るる
とゆふ河原の事をもよとて何と云ふもまゝに合
けぬを給ふしをよとて分別し
トゆふ

一付あぐれりして由世場つまずけりといふ様
 方より申ては式答しるも前より申
 つまらして又よき事なす旨の御り。又誰りも
 極よむりして申しくもさふひうきてよ
 の一真状付出もさうもゆきどもか不
 研とまじい文お家の書紙よりさう
 人さのりといふさうもさうもさう
 但又さういふて理さうもさうも
 ぐいさういふて付あぐれりといふ様
 申すりのりも申すも不許して御り
 と申すやういふてさうもさうも

二回のりも申すは太和の御りといふ
 我國の御り七代といふ御りとい
 付ゆりさういふ文おまの御りとい
 位いふ御り名お申す御りといふ御り
 御りといふ御り。お申す御りといふ御り
 らん御り御り御りといふ御りとい
 御り御り御りといふ御りといふ御り

やゆるらんといの字ハ七代と云ふ大和ふあふと
付ゆるといふまをいりゆるねど力うくし
くさうおゆるますもゆるべし

一巻の長にいつらまは抄物とみえうくゆるべき
や巻中事いつまといやうくしと云ふよ
葉よりこのり代く物撰ウツ外家集皆い
替おにうらうくゆるべしと云ふく人
くくさうまや押ふなどい何と云く世上れ意

よるゆるまは万葉以下の八代集源氏伊勢

物だち和抄紙さう流もう何や何れか
やう物とて集て自然不変のうゆるまを
引てし足ゆるまが書りて人どして人のれ先
あもあそくあそくまは流りて事しゆ速
悟りてあそく。或い改るよをうけり又れ
やう物とて集てし人あといりて事しゆ
替るにしゆるん。但三代集千載新古今
よはの抄あといも眼よりけりてハ
しそくしむる人の人小児あといりて

るりし人事ありきやふらりん人さ今

新古今しめあざりしとう後用し

一用藝古に初中後ゆりしう極ありしや

春藝古の初中はもとや事書きし物

りし人もあらずさうやぐり初雅の人かどい

何んともいふも古今よりたどめて用るも

う新書とつう新しきしてししきしき

より又字くさりあざりしきしき

よし人よ新しき連歌よ女系世にあら

むらとらげみぬきん人かたつらゆりし

ゆえんあをんむらりしきやあやう

新書のらしはゆりしんと申し一書

抄取すしえはゆりしきとくんとし

いすえまももししきむらりし所と

えあやうししき長きむらりし移り

ししきむらりしきむらりしき

あやうしきむらりしきむらりしき

あやうしきむらりしきむらりしき

つとめ抄物と脚中^{きやくちゆう}にまで眼をつわやい
と享^{えん}方^{かた}のりやう海^{うみ}。こと様^{さま}のなほく^{なほく}
アゆんんあまアせむとてやうゆるあひ
ゆいんあまあま^{あま}と無^む覚^{かく}らんあか^{あか}
先^{まへ}をあまもまみえん^{えん}アゆ^ゆとうせゆ^{せゆ}
かあ^{かあ}と^とえん^{えん}海^{うみ}アゆ^ゆと^とき^き
作^{つく}のあ^あつ^つい^いふ^ふ初^{はつ}中^{ちゆう}はらん^{らん}抄^{しやう}巻^{まき}と
只^{ただ}巻^{まき}古^この初^{はつ}中^{ちゆう}はらん^{らん}抄^{しやう}巻^{まき}と
う^うは^は抄^{しやう}物^{ぶつ}の^のり^りや^やう^う海^{うみ}と^とき^き

一ちゆあ。まつてさうんなくあておはる
ら^らが^がい^いし^し。家^{いへ}の初^{はつ}中^{ちゆう}はらん^{らん}抄^{しやう}巻^{まき}と
ま^まあ^あま^まと^とき^きと^とき^きと^とき^きと^とき^きと
そ^その^のあ^あま^まと^とき^きと^とき^きと^とき^きと^とき^きと
五^ごり^りと^とき^きと^とき^きと^とき^きと^とき^きと
あ^あま^まと^とき^きと^とき^きと^とき^きと^とき^きと
て^てい^いふ^ふと^とき^きと^とき^きと^とき^きと^とき^きと
ま^まあ^あま^まと^とき^きと^とき^きと^とき^きと^とき^きと
な^なと^とき^きと^とき^きと^とき^きと^とき^きと^とき^きと

ちすあはれ風物わおま成 良乃
風拵くむまをく如行し流ぬる
花もそ人むる月夜めとれを宗砌
梅さくき山守やまこ人日
ゆもさる梅ふふゆる山移り昨日
北野の家道承て其年

春と秋時をあふはまから成日

いれりい報あのみとやしとれ

はるいさし花雪のいら昔くか教向

花よあうらん初り屋いともし日

花の敷えまうあるものうは春もあ日

名もあうぬおまお川もあ日

小松とたにいけしこころもあは日

ゆめりのいぬお巧たにとくもあは日

てとうもやしとれんを海と機又人あ日

塔とそ月お巧とすいひもとそくゆえ

日しは氣花くあはつりれお日

井原のい伊勢大勢夫にて陸軍のあ日

あつげしるやばあも西中しとまゆら
竹井あしりしとあつげしるやばあも
ゆらん共さふあつげしるやばあも
るやう

さつげしるやばあも西中しとまゆら
ゆらん共さふあつげしるやばあも
るやう

さつげしるやばあも西中しとまゆら
ゆらん共さふあつげしるやばあも
るやう

さつげしるやばあも西中しとまゆら
ゆらん共さふあつげしるやばあも
るやう

うすのきちほくもくちのたつた日

此のたつた日と背くらもほくもつたひらけ
く振舞いしきつちのまじりつたひらけ
づきもつたひらけ風情もつたひらけ
まじりつたひらけもつたひらけ
もつたひらけもつたひらけ
まじりつたひらけもつたひらけ
まじりつたひらけもつたひらけ
まじりつたひらけもつたひらけ

たつたひらけもつたひらけ
まじりつたひらけもつたひらけ
まじりつたひらけもつたひらけ
まじりつたひらけもつたひらけ
まじりつたひらけもつたひらけ

一服のたつたひらけもつたひらけ
まじりつたひらけもつたひらけ
まじりつたひらけもつたひらけ
まじりつたひらけもつたひらけ
まじりつたひらけもつたひらけ

此水水などいふ事神又千とあるの末
いふ事あてもなきこと。又此の事いふ
何となく分るは細合はるあり。此の
白く切し。此のいふことして何れも
申すは此の事いふ事いふこといふ
此の事いふ事いふ事いふ事いふ事
いふ事いふ事いふ事いふ事いふ事
いふ事いふ事いふ事いふ事いふ事

一連此の或いふ事いふ事いふ事
いふ事いふ事いふ事いふ事いふ事
いふ事いふ事いふ事いふ事いふ事
いふ事いふ事いふ事いふ事いふ事

此して今いふ事いふ事いふ事
いふ事いふ事いふ事いふ事いふ事
いふ事いふ事いふ事いふ事いふ事
いふ事いふ事いふ事いふ事いふ事

鹿行々いふ事いふ事いふ事
いふ事いふ事いふ事いふ事いふ事
いふ事いふ事いふ事いふ事いふ事
いふ事いふ事いふ事いふ事いふ事

あまのりや或人

こぼれゆく志のあはれし舟

とすけりしとよき事^{たひ}として返さるし

次は連歌古の雑借とすいねりの事^{たひ}

雑借^{たひ}とすいねりの事^{たひ}たる事^{たひ}

こぼれゆく志のあはれし舟

雑借とすいねりの事^{たひ}

雑借とすいねりの事^{たひ}

雑借とすいねりの事^{たひ}

雑借とすいねりの事^{たひ}

雑借とすいねりの事^{たひ}

雑借とすいねりの事^{たひ}

雑借とすいねりの事^{たひ}

雑借とすいねりの事^{たひ}

雑借とすいねりの事^{たひ}

雑借とすいねりの事^{たひ}

雑借とすいねりの事^{たひ}

雑借とすいねりの事^{たひ}

9
誰彼の紙もろくやうりやとてのうれて案帳
まどはゆるりやまの書案の上のうりやとて
了。此書ははるるん人の只連多のうり
るものぞとてしゆるん中をトリてんがし。
而給もろく遊芸とてのうりやとてのうり
やとて人九在んやとてのうり

たほ庵の書とてのうりやとてのうり
ま田のうりやとてのうりやとてのうり

他のまき紙のまき紙のまき紙

うりやとてのうりやとてのうり
紙のまき紙のまき紙のまき紙
まき紙のまき紙のまき紙
まき紙のまき紙のまき紙
まき紙のまき紙のまき紙

毛上りまき紙のまき紙のまき紙
右定年 後紙 後紙 後紙 後紙 後紙
毛紙のまき紙のまき紙のまき紙
常にらとてのうりやとてのうり

車はみだり業しうふさ ともか

人のさるる場の日さりゆさく

とゆうちるいふ云ふが中しちゆうま

ひまふち被たをゆる場は日移の目

くふふたる女車とさひてみずもちり

と業年の強ゆしとね合とたとつら

おをとりる場とゆうちりて車を物と

車いようそへ業りしひらるとふすぬと

ゆさしてとちいさしひらるとふすぬと

のさちちゆ事し又玉照志揚貴妃が古

事つひとゆ事しゆもはそ何とゆ

芳ちる

一神祇新説なるをゆゆるといふ事

凡そいふ法はゆつて世の事とちりてあひ

家の事とちりてあひて終身をたのむ事

はるはすく大衆のちり三白月小新説

善師 補説は一味のあはる母をみるふ

あはるはるに惜しむることをしるし

とうきつにふり共まらりふとて下りてゆき
ぬきぬきとてゆきぬきぬきぬきぬきぬき
ふらふらとてゆきぬきぬきぬきぬきぬき

あつたけの文人 水田とてん
月切きききききききききききききき
氏士とてんとてんとてんとてん
あつたけの早瀬とてんとてん
ゆきとてん川とてんとてんとてん

あつたけの早瀬とてんとてんとてん

あつたけの早瀬とてんとてん
あつたけの早瀬とてんとてん
あつたけの早瀬とてんとてん

あつたけの早瀬とてんとてん
あつたけの早瀬とてんとてん

あつたけの早瀬とてんとてん
あつたけの早瀬とてんとてん
あつたけの早瀬とてんとてん
あつたけの早瀬とてんとてん
あつたけの早瀬とてんとてん

とて。自化不^ふの^ひと^あして人の
所とも^あ才^た子^しを^あぬ^ん終^つか^よの^あらん
ると^あ形^かた^し。身^みの^あ思^し慮^りと^ああ^らを
て^あ常^{じょう}道^{どう}と^あみ^えも^あ死^しの^あり
と^あ死^しだ^らん^だん^の中^{ちゆう}の^あ思^し慮^りも^あり^ます
と^あ思^し慮^り之^の思^し慮^りも^あり^ます
一^い和^わ漢^{かん}内^{ない}の^あ思^し慮^りも^あり^ます
時^じ連^{れん}結^{けつ}の^あ思^し慮^りも^あり^ます

連^{れん}の^あ思^し慮^りも^あり^ます
ま^まや^あ思^し慮^り人^{にん}の^あ思^し慮^りも^あり^ます
何^{なに}の^あ思^し慮^りも^あり^ます
や^あ思^し慮^り入^いら^ぬで^ある^あ思^し慮^りも^あり^ます
咄^はつ^たふ^んと^あ思^し慮^りも^あり^ます
あ^あ思^し慮^りじ^じと^あ思^し慮^りも^あり^ます
く^く思^し慮^りも^あり^ます
一^い文^{ぶん}字^じの^あ思^し慮^りも^あり^ます

る連歌も作させりしをめぐりては
心もくはるに思ふ事とみどしに
くもくもく。又さひみて案ぶる
勢もくもく事所要うい苗時
能起又和自もくもくもくもく
うのす事は惜事之又ひくく
我をたかくてふらもくもくもく

一統争乃中事とめて作事し
も山定て有実おくく作人
答と踏歩らん多登れり
物と主人のまより方より
多き所しひひ。此の蓋と
筆と能くとりて。そね筆
て可然とて能く保て
とりて能くと取の蓋の上より

連歌要心同卷

新編抄歌集巻之七
一書に云ふ

季の良如葉のちあが
秋のいしゆふるちん
此のよきくはげを
上連のよきくはげを
まじりてわがちか
る道ぬらるるあ
まのちり地うを
まじりてわがちか
る道ぬらるるあ

二四

晴りぐらゝやまききぬかゝらゝゝゝ
あや 徳^{とく}魚^{いし}人^{にん} 義^ぎ憤^{ふん}神^{しん} 忍^{にん}のゆあれい
おはのよわねをくろくしんしんをまきしん
あゝゆんをきぬかゝらゝゝのころゆ
べし。堪^た施^しの極^{ごく}位^いありそ年^{ねん}とよのま
はるぬべし。初^{はつ}ののんれゆをまきすこ
ごのゆんゆふ新^{しん}ゆふ入^いるふてしゆ
らめ。能^{のう}を井^いと相^あふ或^{ある}人^{にん}を流^{りゅう}く
やゝゝゝ

おまゝゆれ
一堪^い施^しのんれゆをまきゆふふ人の
中^{ちゆう}ふてまてとあごむのあゝあゝ
あひやどのんれゆをまきゆふふ人の
とし其^{その}一^{いつ}た物^{もの}さつゝく無^むなふ
のちうぶらまゆすゆふらゝゝめえ
みらんをらぬんあごあつふふゆ
らりゝゝ。苗^{めう}たし傳^{でん}るゝ新^{しん}と

れゆらんぞ対の塔能のん比何やまは
い如べうず。又うし何の事か能のうやま
すこしい執筆の念人よゆらんがあら
うし何い筆まはとふかやま
つし何と好ゆ。うし何し何とあ
んまづつとつとるん 前あら
ゆまやい何のくし何とあら
宜がこれ事ぬぐ。大筆依一書教工大書
何とあら何とあら何とあら

て筆とつくりのい何とあら何とあら
りし何とあら何とあら何とあら
みえどい何とあら何とあら何とあら
くちてあらしき何とあら何とあら
あまら何とあらし何とあらし何とあらし
此の何とあらし何とあらし何とあらし
海し何とあらし何とあらし何とあらし
一何とあらし何とあらし何とあらし
は何とあらし何とあらし何とあらし

あゝ能くも所とて中申さ。是一通の條
こと指し出さる約ありしに於ては、
それかある人。又一世の務月ののり
して其骨尾ありぬらふも、
ゆゑ、そののりや、
かゝる連文つゞき、
し、
ぞ。終るは、
かゝる

かゝる物、
務物の月、
あひね、
い、
むん、
あ、
る、
一、

お字のたより 程と云ふより 又字と云ふは
しつと云ふと云ふ人あつたふりて事と云ふ
の字も切やと云ふ又と云ふは 一と云ふは
のふりてお字の 一と云ふは 一と云ふは
やうふりてお字の 一と云ふは 一と云ふは
しつと云ふと云ふ人あつたふりて事と云ふ
程と云ふと云ふ人あつたふりて事と云ふ
しつと云ふと云ふ人あつたふりて事と云ふ
しつと云ふと云ふ人あつたふりて事と云ふ

お字のたより 程と云ふより 又字と云ふは
しつと云ふと云ふ人あつたふりて事と云ふ
の字も切やと云ふ又と云ふは 一と云ふは
のふりてお字の 一と云ふは 一と云ふは
やうふりてお字の 一と云ふは 一と云ふは
しつと云ふと云ふ人あつたふりて事と云ふ
程と云ふと云ふ人あつたふりて事と云ふ
しつと云ふと云ふ人あつたふりて事と云ふ
しつと云ふと云ふ人あつたふりて事と云ふ

一ふりもら極ぬ...あまのこころのふ
あつたふま事ぞや 中野所要ぬ...
し物よりぬ...
右好常...
と...
あ...
あ...
と...
と...
と...

み...
白...
本...
ね...
の...
乃...
長...

かゝる中一に海へ入りては日経るのこゝろ
あゝかゝるくまれば極くは中^レの^レゆゑ
とのづゝ他云いこゝろとゆゑさう海へ
一連致に居しとも執ちては人を申すや
又練磨の文^レはくも執せむともぞくわ
いゆらんが可^レ給^レ事^レや^レ 此^レの^レ執^レの^レ
字^レあ^レはゆ^レぬ^レさ^レさ^レづ^レう^レお^レお^レ推^レは^レ
る。執^レる^レの^レあ^レらん^レい^レつ^レう^レさ^レ人
し。この^レ字^レは^レさ^レら^レう^レ海^レへ^レさ^レる^レ

ゆゑに^レあ^レら^レう^レか^レら^レい^レゆ^レらん^レか^レら^レい^レゆ^レらん^レ
ゆ^レらん^レい^レゆ^レらん^レゆ^レらん^レい^レゆ^レらん^レ
す^レま^レり^レて^レも^レ所^レの^レ序^レに^レあ^レら^レと^レ執^レん^レ
とも^レ執^レて^レを^レ為^レし^レた^レ功^レが^レも^レ入^レら^レぬ^レもの^レ
う^レち^レな^レり^レさ^レん^レい^レふ^レさ^レう^レ海^レへ^レ。又^レさ^レ
る^レあ^レら^レう^レか^レら^レい^レゆ^レらん^レか^レら^レい^レゆ^レらん^レ
ぞん^レと^レあ^レら^レう^レか^レら^レい^レゆ^レらん^レか^レら^レい^レゆ^レらん^レ
ぬ^レれ^レど^レも^レ功^レ入^レて^レは^レい^レふ^レお^レ執^レす^レとも^レ不^レ
の^レあ^レら^レう^レか^レら^レい^レゆ^レらん^レか^レら^レい^レゆ^レらん^レ

連歌教訓

紙巴

一教句にぞおえりまゝの作言まゝ
 好むし同好むし哉しゆ言ふおむつ
 揚り一まゝ為付不二中及新録
 三よいう起るふはむいおぼひおぬま
 況在の哉しそいふまゝどおむし
 おまゝしむらひ口をうすえんゆ
 況在のししはふ文字にそいふとらぬ
 ぞ候句のつゞきやうなり

わが海へ出てはるる春日は

現在おきかれし是より世にわたりて
昔よりいふ又上におちりたりとて申す
字のいふとてはるる世にわたりて
世にわたりてはるる世にわたりて
とくはるる世にわたりて

世にわたりてはるる世にわたりて
世にわたりてはるる世にわたりて
世にわたりてはるる世にわたりて
世にわたりてはるる世にわたりて
世にわたりてはるる世にわたりて

世にわたりてはるる世にわたりて
世にわたりてはるる世にわたりて
世にわたりてはるる世にわたりて
世にわたりてはるる世にわたりて
世にわたりてはるる世にわたりて

世にわたりてはるる世にわたりて
世にわたりてはるる世にわたりて
世にわたりてはるる世にわたりて
世にわたりてはるる世にわたりて
世にわたりてはるる世にわたりて

香川の里のあつたつらうをねく

おしりあつたつらうをねくつらうをねく里のほ

葉にせしむるをねくつらう

一ひらきしむるをねくつらうねくつら

けしりあつたつらうをねくつらうをねくつら

えねくつらうをねくつらうをねくつら

たつたつらうをねくつらうをねくつら

しりあつたつらうをねくつらうをねくつら

のりあつたつらうをねくつらうをねくつら

とつたつらうをねくつらうをねくつら

もつたつらうをねくつらうをねくつら

まつたつらうをねくつらうをねくつら

よつたつらうをねくつらうをねくつら

一ねくつらうをねくつらうをねくつら

おつたつらうをねくつらうをねくつら

あつたつらうをねくつらうをねくつら

んあつたつらうをねくつらうをねくつら

一ねくつらうをねくつらうをねくつら

おつたつらうをねくつらうをねくつら

付。二より三付。三より四付。四より五付。又よれ付とありし。ち方打添く振の
白いけいふてい

年ひけけあう知めううてんう

きしを花しくすむしゆり日

梅の園よあふとけを白いけ

庭戸あまゆ中。あゆむる風

りし。きし柳しあし林のり

あふ下草ゆをばすのころ

くゆしよあゆてりてあゆむる中

庭しゆゆのちあゆ

一寸三の振のりあゆしよあゆ長

けあゆとあゆ。あゆむるあゆ三のあゆ

あゆむるあゆ又あゆのりあゆあゆ

あゆあゆ

あゆあゆあゆあゆあゆあゆ

あゆあゆのりあゆあゆあゆあゆ

あゆあゆのりあゆあゆあゆあゆ

と深く作らざらんか

とていふは一に作らざらんか

その約をいしてとてありていふは

よのれいといふは

一冊をありていふは

とていふは

此字と行まへも一に二に

ありといふは

つらよは此字より上りていふは

一冊をありていふは

あり

鳥のうらみ

一けきよふに字ありていふは

成程の約

いそぎ人

いそぎ人下知していふは

とていふは

格や一冊をありていふは

一そとねんていねくあつなり

一あつむそあつなりきり

一とさぬそつくれ 廿七字にてい

そしよふりていさび

一そとつていさしとぬ

袖は秋のゆかりなり

あつむそあつなりきり

あつむそあつなりきり

又しととととと

若くはととととと

一そとつていさしとぬ

あつむそあつなりきり

あつむそあつなりきり

あつむそあつなりきり

あつむそあつなりきり

あつむそあつなりきり

あつむそあつなりきり

一巻よりしてていふことあるが、くは、
うひ乃やあつひ月やうふをいふうきう
下りつゝさうししてとあはれ

下りのうに二大三はくゆきまらるる
ふりともあまの書あはれ

もいふあはれあはれあはれ
さいのあはれあはれあはれ

ふのあはれあはれあはれ
あはれあはれあはれあはれ

あはれあはれあはれあはれ
あはれあはれあはれあはれ
あはれあはれあはれあはれ
あはれあはれあはれあはれ

一連歌のあはれあはれあはれ
あはれあはれあはれあはれ
あはれあはれあはれあはれ
あはれあはれあはれあはれ
あはれあはれあはれあはれ
あはれあはれあはれあはれ

一悉のトはるあどいりこえてはるやう
さすぞと心くづ

恨ちらんやらきてはるらん

おのひもろまじれあかたつてき

しめくの内おはるるはるらん

あはるるちりこゝのあはるるらん

も留やうしはトウヤウ

一守るむ七少亡國の神といやうを悟らん

徳と七さまあはるるをいれはあはるるらん

あはるるにわらへんあはるる國を鬼神ともやい

あはるるにけさモク民士のらんはもあはるるらん

あはるるに長きらんあはるる國を

あはるるにわらへんあはるるらん

あはるるにわらへんあはるるらん

あはるるにわらへんあはるるらん

あはるるにわらへんあはるるらん

あはるるにわらへんあはるるらん

あはるるにわらへんあはるるらん

あんとあつらんかみへ

大原乃山の子やまを信水に

とていせしして婿つたり

ふ所の業ちく唐のうすもえ

あつらんかみへ

御つらふしや月乃都の舟

あつらんかみへとて婿つたり

あつらんかみへとて婿つたり

わが唐外にわがやめあつらん

あつらんかみへ

あつらんかみへ

あつらんかみへ

あつらんかみへ

あつらんかみへ

あつらんかみへ

あつらんかみへ

あつらんかみへ

あつらんかみへ

ふもややそつうさけあう
うね 他句とまふねのうねすまね
いけーート 他句とのまね
さあやなれや うね
なれ 又下 うね
けし 魚せえぬめ うね
ん 切字 うね
一茶白う

松山風物記

ちんちんやう うね
まのんやう うね
身ノ神も うね
局力 うね
さね うね
さう うね
秋文 うね
志 うね
ゆ うね

あきさしふおしこふねの松
昔ねせりみりや白やと冬めき
年へのはる雨のあけりけり
花さうをばとく人いふるまはは
風をさしけりやと冬めき
いささけりくまねおまらるの松
花いふこ今を柳さくさか
こほしけやふいねはたふし
むすまふしこころ白きまらる

いささくとゆふ松もあきさし
よきし秋いさくわら松いさし
中力いぬらさき井のいさし
いささきとゆふ松もあきさし
松あけりつりこほしけり
世いささくとゆふ松もあきさし
あきさしとゆふ松もあきさし
松あけりつりこほしけり
世いささくとゆふ松もあきさし

月とてしうけやまたりくも足
頃とあふ奈のいかりはくさう

一下知の文字

晴をりし花は紅紫も花の在
ぬきし中々と夏の花はと云原
むおそえ勝月秋のうねのとも
古柳にいととりとせ春のう宿
しうとくめ月つらこのりたをこ

此外下知とてく初は皆切字よあへ

一面のくぬ切字

又月夜と雲の松風若の水
花いそも柳の紅紫ととれつうせ
万のあふとくははみくむはは
一腹才三の事松のうと散うはふきえて
ちとやんていざう知あくさうり地が
うしししししおちおちどるやれれれれ
もまきくまへ

名もとてぬ小ちまに頃河もた

走せしむれば法秋のほみ
又ららね書ゆ月には晴ゆ
世なるあふより松に取らぬて経緯のし
あり。其れも外志ハ白一丸等いあふ
古くは返さし書り事なりとて
一初ん乃めいひひりし事なりとて
うさくしあふにまじり治政に業とめ
かひがくえん書きしついでに
ていしはしむいせきしついでに

らり

一上りて極まにせしむる事なりとて連次
かど初ん乃めいひひりし事なりとて
初中一極まにせしむる事なりとて
おもゆはしむる事なりとて
みぬむる事なりとて
とて月の凡れらるる事なりとて

と清もく田中江竹の鶴の
一汗江よりほゆしやうりてまづと種

をいしつらひのけくまや

おほくそおだにうら海士お

よてだれ野のあれまらね

をうらえんおあはうくらまは海

くはのちうらみり内くまう

をうらえんおあはうくらまは海

をいしつらひのけくまや

をいしつらひのけくまや

をいしつらひのけくまや

をいしつらひのけくまや

をいしつらひのけくまや

をいしつらひのけくまや

をいしつらひのけくまや

をいしつらひのけくまや

をいしつらひのけくまや

をいしつらひのけくまや

連袂會席式

尚純述

一連袂は余の席より先をさふお日えん松
 の事と辯じ。次ふ力と居り安をうくろ
 ひてゆり乃云席に待人乃甲しと計
 けり。慶志せざるゆへに可憐。連袂は工
 夫^{モラ}成りあつて候かあつど扱物^{セウモラ}をいも
 足^{アソビ}ゆゑなり
 一^{アソビ}足^{アソビ}ゆゑなり。古約古守なりと云候し
 心^{ココロ}成^{ナリ}る^ルは^ハ。備^{ツク}へ^テ三^ミ時^{トキ}ふ^ス入^ルと^シ候^シ

く後緒くかん者。母の如く直女如安
相の長形もとうなひ体分出致の用抱也
懸す。これに似る善菩薩の製作多し。ま
連続ふあつらん日いつがうる長年すびもほし
とびて一三懸ぬぐ。丸あるやをや。想らけ
たの徳行あつんといふ人用す。紅葉
とびして時を後し。多敷と教し。あつた
ありり。國墓双六清徳あひいて寧我
ま例て日然らすするるぶぐび。常し

せうのせ帯。銭銀どはめり変化と後り
雪月むし心ととく先伝神と教ひ慈恵の
心もく。孝悌とともくして礼文と好も。
実あつるもまうもく。必冥もあうあひ
幸あつるも若衆もく。外もあつるもあひ
心れく人いつの金のあつるもく。文
ちをくもく。
一やうのあつるもく。鼻し。くくく
く。くくく。あつるもく。胸ひろくあけ

或うで内くしんがむけつて是の福うに
し。づづえん所まのめつてそひひげサ
ひのり鼻まう。自鼻。まうく^{つたかサミ}ひげ
ちまうまうふとすんがあらやう
一とま序ちまうくしんまはけつ初て
そまうれつら程まうつらうひらまう。
田舎やう。あたり。あな物。あな物。
しづう。うて。はまう。せんまう。
あまゆり。あまゆり。あまゆり。あまゆり。

こまうんと結うすれぬんや。あまゆり。
一とま序ちまうくしんまはけつ初て
そまうれつら程まうつらうひらまう。
田舎やう。あたり。あな物。あな物。
しづう。うて。はまう。せんまう。
あまゆり。あまゆり。あまゆり。あまゆり。

綿

七五四号
力

